



Title	駐日大使ゾルフ②：文人大使の交流
Author(s)	中村, 綾乃
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 23-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102216
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

駐日大使ゾルフ② ——文人大使の交流——

中村綾乃

1 はじめに

1928年3月1日付の『読売新聞』のコラムは、ドイツ大使ゾルフ（Wilhelm Solf）と元英国大使エリオット（Sir Charles Eliot）の交流を話題にしている。この記事では、ゾルフを「ドイツでも有名な世界言語学者で植民政策に関する學界の泰斗」、エリオットを「イギリス切つての梵語學者印度哲學のオーソリティ」と紹介し、「この二人の交誼こそ世にも美しい話」と書かれている。さらに「（外務次官の出淵勝次は）この二人の交際とその餘裕綽々たる研究振りを見て頻りに感慨に堪えぬものゝ如くであった」と付け加えられている。このコラムは「本國との電報往復で精一杯と云ふやうな日本の外交官などにはその爪の垢でも少し服ませたらヨカロ」という皮肉で締めくくられている¹。

ゾルフとエリオットは外交官のみならず、學者としての顔も持っていた。ゾルフはドイツの大学でサンスクリット語とインド哲学を修め、博士号を取得していた。一方のエリオットは言語學者としてアラビア語、トルコ語、中国語をはじめとする二十の言語を研究し、英語によるスワヒリ語教本やフィンランド語文法の解説書を執筆している²。この二人以外にも、1920年代の日本にはフィンランド代理公使ラムステット（Gustaf Ramstedt）やフランス大使クローデル（Paul Claudel）など、名の通った文人外交官がいた³。ラムステットはアルタイ語學者であり、エスペ란ティストとしても知られていた。クローデルは詩人大使という呼び名を持ち、詩人、劇作家として活躍していた。

二つの世界大戦に挟まれた戦間期、ゾルフは新生共和国最初の大使として来日した。先の大戦で戦火を交えた日本の政財界の要人、諸外国の外交官と交流し、ドイツの国際社会への復帰、各国間の関係改善をはかろうとした。公私ともに親交を持った後藤新平から依頼を受けて、国交回復に向けた日ソ間の会談の仲介もしている。文人としての教養と知識、洞察力を活かし、柔軟な発想で相手国との関係を深めること、これが文人大使としての使命であった。

本稿ではゾルフの個人文書に依拠しながら、彼の駐日大使としての事績、特に外国公使や大使との交流に光をあてる。ゾルフの個人文書は、コブレンツのドイツ連邦文書館に所蔵されており、外交文書と個人書簡、日記などが含まれている。これまでに刊行されたゾルフの伝記、彼の事績に言及した研究はこの個人文書に依拠している⁴。

2 ポリシェヴィズム脅威論

（1）外務大臣と首相との会談

来日から約一カ月後の1920年9月6日、ゾルフはクニッピング（Hubert Knipping）宛ての書簡をしたためた。その書簡の中で、外務省への表敬訪問、外国の大使や公使の顔ぶれ、彼らとの交流を伝えている⁵。なおクニッピングは、1913年から1917年まで駐上海ド

¹ 『読売新聞』1928年3月1日（ヨミダス）。

² Cortazzi, Hugh (2004). *British Envoys in Japan, 1859-1972*, Kent: Global Oriental, pp. 114-122.

³ ラムステット、グスタフ・ヨン著／坂井玲子訳『フィンランド初代公使滞日見聞録』日本フィンランド協会、1987年；クローデル、ポール／樋口裕一訳『天皇国見聞記』新人物往来社、1989年；クローデル、ポール／奈良道子訳『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』草思社、1999年；アルバム・クローデル編集委員会『詩人大使ポール・クローデルと日本』水声社、2018年。

⁴ von Vietsch, Eberhard (1961). *Wilhelm Solf, Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich; Hemenstall, Peter J / Mochida, Paula T. (2005). *The Lost Man-Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

⁵ Solf an Knipping, Tokio den 6. September 1920, BArchK, N1053-115.

イツ総領事を務めた後、ベルンの公使館勤務を経て、外務省東アジア局長のポストに就いた人物である⁶。

この書簡の中で、ゾルフは「外交文書としてまとめるには、逐一論拠を挙げなければならないが」と前置きし、矜持を持って述べている。

しかし私信であれば、足りない論拠については確信をもって、補うことができるでしょう。結局のところ、世界中を旅して回り、行く先々で人々と食卓を囲んできた私だからこそ、一か所に根を張る偏狭な俗物よりも、短い期間でより多くのことを見聞し、学ぶことができるのです⁷。

彼の言う「一か所に根を張る偏狭な俗物」とは日本に長く暮らし、保守的な傾向の強いドイツ人を指している。ドイツ革命時、ゾルフは左派から帝政期の役人と位置づけられ、反革命のレッテルを貼られたが、日本にいたドイツ人からは新生共和国の象徴であり、リベラルな大使と目され、反感を買ったこともあった⁸。

1920年8月9日、ゾルフは外務省を訪れ、外務大臣の内田康哉に信任状を提出した。信任状の提出に際し、ゾルフと内田の会談が実現した。この会談は、駐日スイス公使館の書記官ジニョー（John Gignoux）の仲介で行われ、彼も同席した。ジニョーによれば、内田とゾルフの会談は「外務大臣の旧友が休暇から戻り、挨拶に立ち寄った場に居合わせたような」和やかな雰囲気で行われた。この会談で、ゾルフはドイツ革命に対する自らの立場と見解を明らかにしている。ゾルフは、ポリシェヴィズムを「バチルス（病原菌）」に例え、ポリシェヴィズムの影響がドイツ国内に広がることに警戒感を示した⁹。なお内田はロシア革命時、大使としてペトログラードに駐在していた。

内田との会談に言及した翌日、ゾルフは再び筆をとって、クニッピング宛ての書簡をしたためた。この書簡の中で、首相の原敬と会ったことを伝えている。原についての印象は「やや狡猾さを帯びているものの、堂々としていた」というものであった¹⁰。

ゾルフは自らの任務を、日独間の経済関係の強化と文化・学術交流の促進としており、日本との政治外交、軍事上の協力ないし連携は念頭に置いていなかった。日本の軍部と政界の中に、日英同盟に替わるドイツとの同盟を求める声があることを認識はしていたが、日本を政治的、軍事的なパートナーとは位置づけていなかった。首相の原と外務大臣の内田との会談でもそうであったが、日独間の政治的、軍事的な協力ないし連携に関する話題は避けていたのである。

（２）「政府なき国家の外交代表」

皇居での信任状捧呈式、外務省への信任状提出、表敬訪問といった一連の儀式を終え、ゾルフは一息つく間もなく、他の外国大使や公使を訪問した。そして、外国大使や公使の中に「政府なき国家の外交代表」がいることに驚く。

奇妙なことといえば、ロシアのような存在しない国家（つまりそれはロシア帝国のことを指しているのですが）が代表、しかも大使を派遣しているのです。そして何より驚くべきことは、この大使がドワイエンとして外国大使と公使を率いているのです。私としては、日本政府がこのような特例を認め、他の大使や公使がロシア帝国の大使を自らのリーダーとして受け入れている限り、「波風を立てないこと（*quieta non movere*）に尽きる、それが最適解」と考えています¹¹。

⁶ Schmitt-Englert, Barbara (2012). *Deutsche in China 1920–1950—Alltagsleben und Veränderungen*, Gossenberg: Ostasien-Verlag, S. 75.

⁷ Solf an Knipping, Tokio 6 September 1920, BArchK, N1053-115.

⁸ 中村綾乃「駐日大使ゾルフ —上下逆さまのオペラグラスで舞台を観る」言語文化共同プロジェクト 2023『言語文化の比較と交流』(11), pp. 29-31, 2024年。

⁹ Solf an Knipping, Tokio den 6. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹⁰ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹¹ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

この「政府なき国家の外交代表」とは、クルペンスキー（Vasily Krupensky）を指している。彼はロシア革命が起こる前年、駐日ロシア大使に任命された。革命以降も日本がボリシェヴィキの新政権を承認していなかったことから、反革命派の白色政府の大使として駐在を続け、ドワイエンと呼ばれる外交使節団の長も務めていた。

なお駐日フィンランド代理公使のラムステットは外交使節団に加わる際、クルペンスキーから立場上、フィンランドの独立を認めることはできず、公式の招待状や書簡を送ることができないことを告げられた。そのためフィンランドの外交代表としてではなく、私人として関係を持たなければならなかった。1920年8月、ポーランド代理公使としてタルゴフスキ（Józef Targowski）が来日する。タルゴフスキに対しても、クルペンスキーは私人として関係を持つことを告げている¹²。

クルペンスキーは帝政ロシア最後の駐日大使となる。というのも、1921年に入ると日本政府はクルペンスキーを正式な大使として認めない意向を示したのである。新政権の全権使節が来日するまでの間、書記官のアブリコソフ（Dmitriy Abrikosov）が代理大使となった。なおドワイエンはクルペンスキーから英国大使のエリオットに引き継がれた。

（3）「ヤヌスの顔」

クルペンスキーについて、ゾルフは「愛嬌のある伊達男」と記しており、好印象を抱いた。そして、クルペンスキーと対照をなす危険人物として、ヨッフエ（Adolph Joffe）の名前を挙げている¹³。ドイツ革命時、外務長官だったゾルフはボリシェヴィキ革命への転化を阻止すべく行動した。エーベルト（Friedrich Ebert）率いる政府の閣僚にソ連のボリシェヴィキと癒着している者がいることを告発し、この告発がきっかけで外務長官を辞任したのである¹⁴。この時、ゾルフの告発を受けたのは独立社会民主党のハーゼ（Hugo Haase）とバルト（Emil Barth）であった。1918年12月9日、ゾルフはエーベルト宛ての書簡をしたためた。その中で「ソヴィエトの元駐ベルリン公使なる人物がボリシェヴィキのプロパガンダ誌を配布しており、さらには武器の調達まで目論んでいます」と書いている。ここで言及している元駐ベルリン公使がヨッフエであった¹⁵。

日本から書き送った書簡の中でも、ゾルフは折に触れて、ボリシェヴィズムの脅威を唱えていた。1920年9月7日付けのクニッピング宛て書簡の中で、ヨッフエの名前を挙げ、彼のような人物に対する警戒を促している。

ドイツ外務省に念を押しておいていただきたいのです。ベルリンにはヨッフエのような人物が潜んでいることを。あの時の脅威は過去の出来事として過ぎ去ったものではなく、今なお続いているのです。どうかそのことを忘れないで下さい¹⁶。

さらにゾルフは、ボリシェヴィズムを古代ローマ神話の「ヤヌスの顔」に例えている。

ボリシェヴィズムにはヤヌスのような二つの顔があるのです。私はその西側の顔をドイツで目にしました。そして今、私は東側の顔を見ているのですが、それもまた不気味な笑みを浮かべたグロテスクな顔なのです！¹⁷

クルペンスキーが日本を去った後、1923年1月、後藤新平の招きで来日したのがヨッフエであった。ゾルフは、後藤とヨッフエの会談の仲介役を担い、彼の言うところの「ヤヌスの東側の顔」と対峙することになる。

¹² ラムステット、グスタフ・ヨン著／坂井玲子訳『フィンランド初代公使滞日見聞録』日本フィンランド協会、pp. 54-58、1987年。

¹³ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹⁴ Solf an Ebert, Berlin den 9. Dezember 1918, BArchK, N1053-60.

¹⁵ 中村綾乃「ドイツ革命とゾルフ—帝国の終焉から新生共和国へ—」言語文化共同研究プロジェクト2020『言語文化の比較と交流』(8)、p. 29、2021年。

¹⁶ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹⁷ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

ゾルフはこの書簡の中でポリシェヴィズム脅威論を唱え、警戒を促した後、イタリア公使のパウルッチ・ディ・カルボーリ（Raniero Paulucci di Calboli）とフランス公使のバプスト（Edmond Bapst）に言及している。いずれの公使も礼儀正しく心遣いがあるとし、好感を持った。ただし、パウルッチ・ディ・カルボーリについて「彼はポリシェヴィズムにさほどの脅威を抱いておらず、政権が三年も続いているのだから、それほど悪いものではないくらいに考えているようだ」と記している。さらにゾルフは「嘆かわしいことに、ポチヨムキンの子孫たちがポリシェヴィキになり、祖先のお家芸を継承している」と風刺を込めて付け加えている¹⁸。

3 新生国家の公使

ポリシェヴィズム脅威論を唱えた同じ書簡で、「ここでリフレッシュのためのカクテルの登場です」という口上を切り、チェコスロヴァキア公使のペルグレル（Karel Pergler）を紹介している¹⁹。ペルグレルの前任者はニエメツ（Václav Němec）である。第一次世界大戦時、ニエメツはオーストリア・ハンガリー軍に招集され捕虜になった。その後、ロシアでの抵抗運動に加わり、チェコ軍団を率いるようになり、駐日チェコスロヴァキア外交代表に任命された。チェコスロヴァキアが独立し、日本との外交関係が成立した後、ペルグレルが駐日公使として来日し、初代駐日公使となった²⁰。

ゾルフの文面からは、ペルグレルとの初対面での衝撃、外交現場に現れた新生国家の公使への期待が伝わってくる。

ペルグレルはたどたどしいドイツ語で私に話し掛けた後、できれば英語で話したいと言断ったのです。そしてここからが衝撃の展開でした。ボヘミア生まれの男が生粋のヤンキーに変貌を遂げたのです。彼は本場のカウボーイにも引けを取らない訛りのアメリカ英語で話し始めました。何とも興味深い人物です。ドイツ人とチェコ人の両者の要望についても理解を示し、的を射た考えを持っていました²¹。

ゾルフが来日する約半年前、1920年2月、ペルグレルは初代チェコスロヴァキア公使として来日した。日本到着の際、新聞取材に応じ、自らの生い立ちを語っている。

本國を出てから久しいので状況は能く知らぬ、僕はボヘミヤの生れで、幼少の時に米國に亙り、其後ブラツグに歸って政治的教育と新聞記者としての訓練を経爾後は操觚界に身を投じて居たが戦争の勃發と共に米國で新聞に雑誌に又は小冊子で故國の獨立を唱道し戦争に力を盡したが其の甲斐あって故國は今回漸く獨立しマサリツク博士は直ちに歸國して新興國の創設に従事している、そして自分は米國に留まりチエツク・スロバツク國を代表して各方面諸種の事務に執掌して居たが今回日本駐劄公使に任命されたのである²²

ペルグレルは米國大統領補佐官のハウス（Edward M. House）と面識があり、自他ともに認める知米家であった。ゾルフはペルグレルから得られる米國情勢の情報に期待していたが、彼の駐日公使としての任期は1年に満たなかった。外務大臣のベネシュ（Edvard Beneš）と対立し、ペルグレルは駐日公使の職を解かれ、外務省を追われることになった。その後ペルグレルは米國に移住し、ゾルフとの交流は途切れた²³。

1921年8月、ペルグレルの後任として、フヴァルコフスキー（František Chvalkovský）が来日する。フヴァルコフスキーは社交家として知られていた。日本にいた1921年から1923年までの間、フヴァルコフスキーはゾルフとフランス大使クローデルの間を行き来してい

¹⁸ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

¹⁹ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

²⁰ 長與進『チェコスロヴァキア軍団と日本 1918-1920』教育評論社、pp. 154-156、2022年。

²¹ Solf an Knipping, Tokio 7 den. September 1920, BArchK, N1053-115.

²² 『読売新聞』1920年2月13日（ヨミダス）。

²³ 長與進『チェコスロヴァキア軍団と日本 1918-1920』教育評論社、pp. 154-156、2022年。

た。後述するように、ゾルフとクローデルは競合関係にあり、牽制し合う状態が続いていたが、フヴァルコフスキーを介して互いの立場や思惑を探り合うことがあった²⁴。

フヴァルコフスキーは駐日公使としての任務を終えた後、駐米公使、駐イタリア公使を経てプラハに戻り、外務大臣となる。ミュンヘン協定成立の翌年、1939年3月、ヴァルコフスキーは、大統領ハーハ（Emil Hácha）とともにベルリンに赴き、ボヘミアとモラヴィアを「総統の手に委ねる」とするプロトコルに署名した。

4 中国人との政治対談

1920年9月9日、ゾルフは再び筆をとり、クニッピング宛ての書簡をしたためた。この書簡では、中華民国代理公使の莊景珂との会談について伝えている。ゾルフは日本人通訳を手配して、この通訳を介して莊との会談に臨んだ。初対面の莊の印象は「謙虚で知的な好青年」というものであり、次のように付け加えている。

彼はまるで「自分はいかにも著名な政治家と向かい合うには身分不相応であり、末席を汚しているにすぎない」と考えているかのようだった²⁵。

この最初の会談において、莊は口数が少なく、社交辞令程度の挨拶を交わしただけであった。別れ際に莊の方から、英語を話す中国人通訳を同伴し、別の日に会談の機会を持ちたいという申し入れがあった。最初の会談において、莊は日本人通訳の手前、あえて政治的な問題には触れなかったのである。

中国人通訳を介し、英語で行われた二回目の会談では莊が口火を切った。莊はドイツとの関係回復への期待を込め、中華民国公使をベルリンに派遣したいと伝えた。ゾルフは「ドイツ政府も速やかな関係回復と公使の交換を望んでいる」と返答し、北京に派遣する公使の人選についても付け加えた。ベルリンと北京間の公使交換について、ドイツ側の意向を確認すると、莊は間を置かずに本題である山東問題に言及した。最初の会談では日本人通訳の存在を意識し、この話題を出すことを控えたのである。まず莊は、山東省の旧ドイツ権益、いわゆる山東問題についてゾルフ個人の見解を問うた。ゾルフは「本来であればドイツと中国の当事国間の協議によって解決を図るのが妥当なプロセスである。しかしヴェルサイユ条約によって阻まれており、ドイツは同条約を厳格に遵守しなければならない立場にあるため、山東問題には関与できない」と述べ、中国と日本の二国間の協議に委ねるべきという見解を述べた²⁶。

中国国内では国際連盟に訴えるべきという意見が大勢であり、政府もその方針を固めていた。しかし莊個人としては、日本政府と交渉のテーブルに着くことが最善の解決策と考えていた。ただし、莊がその解決策を表立って主張することはできなかったのである。中国国内において、彼は「親日派」として位置づけられ、度重なる批判に晒されていたからである。ゾルフは「国際連盟の基本理念に反して、各国が二国間・多国間の同盟を結ぶ状況下で、中国人は本当に国際連盟に期待しているのか」という質問を投げ掛けた。この質問に対して、莊は「政治家の多くは国際連盟に期待はしていないが、世論の圧力があまりにも大きいために、中国政府としては国際連盟に訴える他ない」と答え、次のように付け加えた。

もし家族の誰かが病気になって、皆が名指しでこの医者を呼ぶようと強く訴えたら、家長としてはその要求を受け入れざるを得ないのです。たとえその病人が命を落とすことになったとしても²⁷。

²⁴ クローデル、ポール／奈良道子訳『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』草思社、pp. 48-49、1999年。

²⁵ Solf an Knipping, Tokio den 9. September 1920, BArchK, N1053-115.

²⁶ Solf an Knipping, Tokio den 9. September 1920.

²⁷ Solf an Knipping, Tokio den 9. September 1920.

ゾルフはこの莊との会談を通じて、日本人と中国人とでは、政治対談や交渉のスタイルが異なることに気づく。彼によれば、日本人は直ちに核心的な議題に入ることはせず、前置きに長い時間をかけ、慎重に言葉を選びながら議論を展開する傾向があった。ゾルフはこの対話スタイルを「アーティチョークの葉を一枚ずつ歯で引き剥がして食べているよう」と表現している。対照的に、中国人の莊は前置きを早々に切り上げ、直ちに山東問題という本題に切り込もうとした。また莊は、本題に入るまでの間、はやる気持ちを抑えようとはせず、表情や仕草から感情が露わになることがあった。莊との対談について詳述したこの書簡は、次のように締めくくられている。

この中国人について、私の目線から見たまを述べました。「原点 (*terminus ex quo*)」という目線からです。なぜなら、私にとって外交使節団のメンバーとの政治対談はこれが初めてだったからです。しかし他方で「到達点 (*terminus ad quem*)」という目線も含まれています。というのも、あなたは中国人のことを、当事者のような目線で理解しておられるでしょうから²⁸。

ゾルフの関心は山東問題ではなく、日本人と中国人の外交儀礼、政治文化の違いに向けられていた。ただし政治対談や交渉において、日本人は徐々に話題の核心に迫るのに対して、中国人は直ちに核心に切り込み、単刀直入に主張や質問を提示するという指摘は、中国駐在歴を持つクニッピングにしてみれば既視感を覚えるものだったかもしれない。

5 旧友との再会

エリオットとゾルフが初めて出会ったのは1899年。場所は南太平洋のサモア諸島の西部、ウポル島であった。サモアには村落の集合体からなる首長国があり、首長同士の覇権争いが絶えなかった。1898年から1899年にかけて、首長位の継承をめぐる争いが起き、この抗争に独、米、英の三国がそれぞれの利害をもって介入し、三国の植民地争奪戦となった。米国、英国との交渉役として、ドイツからサモアへ派遣されたのがゾルフであった。1899年5月、ゾルフはアピアの外国人評議会の会長に就任し、三国の利害調整をはかった。外国人評議会には、ドイツ代表委員にシュテルンブルク (*Speck von Sternburg*)、米国代表委員にトリップ (*Bartlett Tripp*)、そして英国代表委員に選出されたのがエリオットだった。結局、英国はサモアから撤退するかわりに、トンガおよびソロモン諸島の領有を宣言したため、米独間でサモアの分割が決められる²⁹。

このサモア分割の前夜、1899年7月29日、エリオットはゾルフに書簡を送っている。この書簡で、エリオットは政府会議の召集をめぐって意見対立はあるものの、ゾルフとの友情は揺るがないことを強調している。

これまであなたとは友好的な雰囲気のもと、対話を重ねてきました。ですからあなたが外国人評議会のトップにふさわしくないなどと微塵も考えておりません。そのことを改めてお伝えする必要はないでしょう。私はこれまでの評議会で、あなたが裁判所のトップに向いていないというようなことは一切言ったことがありません。あなたには十分な資質があり、適任であることは疑いようもありません³⁰。

この書簡は「私にとって、あなたと出会えたことはサモアでの特別な思い出となるでしょう」という言葉で締めくくられている。外国人評議会において、エリオットはドイツ代表委員のシュテルンブルクとそりが合わず、しばしば対立していた。この時、二人の仲裁役を買って出ていたのがゾルフだったのである。

²⁸ Solf an Knipping, Tokio den 9. September 1920, BArchK, N1053-115.

²⁹ 中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層—混合婚をめぐる議論を起点として」工藤章・田嶋信雄編『ドイツと東アジア 一八九〇—一九四五』東京大学出版会、pp. 262-263、2017年；飯田洋介「皇帝と大統領のあいだで—外交官シュテルンブルクとドイツの世界政策」桑名映子編『文化外交の世界』山川出版社、pp. 65-89、2023年。

³⁰ Eliot to Solf, Apia July 19. 1899, BArchK, N1053-115.

サモアでの植民地分割交渉のテーブルから二十年、ゾルフとエリオットはともに駐日大使となり再会を果たした。エリオットとの再会について、ゾルフは「幸先がいい」と記している。

エリオットは私のことを温かく迎え入れ、開口一番、サモア時代の思い出話に花を咲かせ、二十年ぶりに会えたことを喜んでいるようでした。彼は私をお茶に招き、とりとめの話をしていましたが、時事問題やニュースになっている話題には一切触れませんでした。彼についてですが、噂されているように反独的なのか、あるいは親独的なのか、それとも無関心なのかを探ろうとさりげなく話題を振ってみました。巧みにかわされてしまいました³¹。

ゾルフとエリオットが駐日大使に任命された背景には日英同盟があった。この同盟は中国大陸における日本と英国の権益を相互承認、擁護するものであったが、仮想敵国だったロシアは崩壊し、その存在意義は失われていた。またカナダを筆頭とする英国連邦の構成国が同盟に反対していた。日本と英国の双方から、同盟に反対する声が上がリ、日本の軍関係者のなかから英国との同盟関係の解消とともに、ドイツへ接近をはかり、ドイツを介してソ連と連携しようとする動きがあったのである³²。

エリオットは日本との関係を重視し、日英同盟の存続を唱えていたが、本国政府は米国との関係を優先し、同盟関係に終止符が打たれた。またワシントン会議で採択されたワシントン海軍軍縮条約で日本の海軍力は制限され、日英関係は冷却化した。はからずもエリオットは日英同盟の終焉を見送る役となり、一方のゾルフは日英同盟に替わる日独ソの連携構想の主軸と目されたのである。

日英同盟なき後、エリオットは米国との協調体制の強化をはかる本国政府の政策に反対し、1925年をもって駐日大使の職を解かれ、翌1926年2月、外務省を去った。エリオットが務めていたドワイエンは、ゾルフが引き継ぐことになった。クニッピング宛ての書簡の中で、ゾルフはエリオットの解職に触れているが、その文面からも戸惑いの感情が読み取れる。

サー・チャールズ・エリオットの突然の召還について、一体どのような事情があるのか調べていただけないでしょうか。私としては、彼の辞任が残念でなりません。彼はサモア時代からずっと変わらぬ友情を寄せてくれました³³。

エリオットの後任となったティリー (John Tilley) について、ゾルフは「有能な官僚であり、真面目で働き者」と評価しながらも、「政治的には小物」であり「会話は極めて退屈」と不満を述べている³⁴。

1926年4月22日付の『ジャパン・タイムズ&メール』*The Japan Times & Mail*には、ドイツ大使館で行われたアジア協会の会合で、ゾルフが行った演説が掲載されている。演説の冒頭、ゾルフはエリオットの卓越した才能と教養に敬意を表し、彼との対話に刺激を受けて、仏教に関する研究論文を執筆したことを明かした。そしてゾルフは、アジアの宗教や文化に対する欧米諸国の人々の無知と無理解を批判し、彼らが仏教に関する知識を少しでも得て理解を深めることで、誤解がなくなり、国際情勢の緊張を和らげることができると述べた³⁵。

エリオットとゾルフの交流は、エリオットが外交官の身分を失った後も続いた。学者としての本分に戻ったエリオットは帰国せず、日本で余生を過ごすことを決めた。彼は奈良

³¹ Solf an Knipping, Tokio den 7. September 1920, BArchK, N1053-115.

³² 中村綾乃「駐日大使ゾルフ ―上下逆さまのオペラグラスで舞台を観る」言語文化共同プロジェクト2023『言語文化の比較と交流』(11)、pp. 27-28、2024年。

³³ Solf an Knipping, Tokio den 16. Oktober 1925. BArchK, N1053-115.

³⁴ Solf an Knipping, Tokio den 23. Januar 1928, BArchK, N1053-115.

³⁵ *The Japan Times & Mail*, Thursday, April. 22, 1926, The Japan Times Archives.

のホテルに滞在し、仏教經典の研究に専念した。来京の際には、ゾルフの来賓としてドイツ大使公邸に滞在し、旧交を温めた。

6 日本の独仏戦

1921年5月25日付の『読売新聞』の紙面には「佛蘭西文化の爲め 外交官の錚々連が交つて學界に挑戦 獨逸系統が日本文化の中心を爲すとは國辱だとて」という見出しが躍る。同記事によれば、日本の学界は帝国主義と軍国主義に根ざしたドイツ文化が主流であり、フランス文化が蔑ろにされていた。駐仏大使に再任された石井菊次郎は、日仏間の文化交流とフランス文化の普及を進めていた。フランス同好会は雑誌『フランス文化』の刊行、講演会の開催、またフランス留学のための奨学金制度の拡充をはかった。この同好会はドイツ文化の独壇場である「學會に挑戦」というスローガンを掲げ、駐日大使の任を受けたクロードに希望を託した³⁶。

クロードは外交官である傍ら、劇作家、詩人としても活躍しており、フランス文壇の重鎮だった。なおクロードの前任者であるバプストは公使であった。フランスの外交使節が公使から大使に格上げとなり、最初に大使に任命されたのがクロードであった。

クニッピングとクロードは旧知の間柄であった。クニッピングはゾルフ宛ての書簡の中で、クロードの作品の批評に触れた後、彼の政治的立場について伝えている。

戦前のドイツでは、クロードの作品は絶大な人気を誇っていました。批評では、フランス的な精神とドイツの知的特性をつなぐ架け橋として称賛され、そうした調和の方向性において、彼への期待も大きかったのでしょう。政治的な立場はといえば、彼は自他ともに認めるフランス愛国者であり、帝国主義的な傾向があるのも確かです。ですから、今のところは我がドイツの敵対者といえるでしょう。その意味では、あなたが彼に好感を抱くということは考えにくいでしょう³⁷。

なおクニッピングは、クロードを説得する際の切口として「彼のプライドに訴えかける」という助言を付け加えている。

1923年1月11日、ドイツの賠償金の遅延に対する報復措置として、フランスとベルギーがルール地方を占領した。このルール占領の報を受け、ゾルフは『朝日新聞』の紙面で「日本国民に告げる」と呼び掛け「暫く思ひを潜めて事の真相を知悉し給へ、諮ることなくその推移を追うて判断されたい」と訴えた³⁸。

さらに同年1月17日付の『朝日新聞』には、「日本の獨佛戦」という見出しの記事があり、次のように書かれている。

詩人大使クロードを日本に派遣した佛蘭西は日佛美術交換や或は日本の文士に勳章を興へたり機關雑誌を出したりして、所謂佛蘭西文化の宣傳に大努力とある、陸軍、官海、醫學、法學の各方面に從來根をはつてゐた獨逸文化に向つて戦ひは眞最中だ。ルール地方侵入の精神は日本では文化戦争となって現れてゐる³⁹。

1926年4月30日、ゾルフは駐仏ドイツ大使ヘッシュ（Leopold von Hoesch）宛ての書簡をしたためた。この書簡の中で、ゾルフはクロードの戯曲作品『聖女ジュヌヴィエーヴ』について、「とりとめがなく、支離滅裂な詩的作品」、「粗野で品位を欠いた表現」、「悪趣味」という言葉を並べ立てて酷評している。ゾルフは自らこの作品の批評を書き、その批評を日本語に訳して、日本の新聞社に持ち込んだ。新聞への掲載に際して、

³⁶ 『読売新聞』1921年5月25日（ヨミダス）。

³⁷ Knipping an Solf, Berlin den 22. Januar 1921, BArchK, N1053-115.

³⁸ 『朝日新聞』1923年（大正12年）1月15日「朝日新聞記事クロスサーチ」。

³⁹ 『朝日新聞』1923年（大正12年）1月17日「朝日新聞記事クロスサーチ」。

本名を伏せ日本人の名前を使い、日本の教養人がこの作品を批判しているように装ったのである⁴⁰。

この書簡の中で、クローデルを「官僚ないし外交官としての基準で評価することはできない」と前置きした上で、次のように記してる。

クローデルは独自の存在です。彼の半分は農民、半分は都会人です。そして4分の1は体制の旗振り役、4分の3は詩人、さらに150%のカトリック信者です！⁴¹

1923年10月25日、クローデルのレジェ（Alexis Léger）宛ての私的書簡の中には、「（日本は）ロビンソン・クルーソーと化している」と書かれている。クローデルは、日英同盟の終焉により英米間の結束が強まり、アングロサクソンの軸から日本が外され孤立を深めていることを指摘している。そして、この日本外交の孤立に日仏接近の可能性を見出そうとしていたのである⁴²。

一方のゾルフは、クローデルの使命であった日本におけるフランス文化の普及、日本との関係強化は「期待外れに終わった」と伝えている。

日本人の間でフランス文化の普及をはかること、アングロサクソン、ドイツ文化の影響の拡大を妨げること、いずれも上手くいきませんでした。そう認めざるをえないでしょう。日仏友好が強調される時というのは、フランスを英国や米国の対抗勢力としたい、そうなればいいと望む時、あるいは孤立感を味わいたい時だけです！事あるごとに私は注意喚起をしてきました。パリと東京の間に緊密な友好関係が出来上がっているというのは噂に過ぎません。そんな噂を鵜呑みにしないようにと⁴³。

エリオットとゾルフの間には、文学的素養や文化的関心による結びつき、外交という枠を超えた対話の場があった。しかし対照的に、クローデルとゾルフの関係は国家間の競合、利害と対立が如実に投影されたものとなった。

7 終わりに

1928年12月、ゾルフは駐日大使としての任務を終え、帰国の途についた。駐日大使が外交官としてのキャリアの最後を飾るものとなる。帰国後、ゾルフは自ら新しい政党を立ち上げようとしたが、中央党の支持基盤であるカトリック勢力や社会民主党の左派との提携を拒み、挫折してしまう。またゾルフは、リットン調査団のドイツ代表委員の候補にも名前が挙がったが、親日的な傾向があるとして候補から外された。ゾルフ自身は日本の大陸政策、さらには東アジア全体の問題に対して、ドイツを含む欧米諸国は不介入と不干渉の立場を貫くべきであると主張し、リットン調査団を批判していた⁴⁴。

ヒトラーの権力掌握後、ゾルフは体制批判を憚らなかつた。宣伝相ゲッベルス（Joseph Goebbels）と面会し、ユダヤ人問題について意見を申し入れたこともあった。1933年5月14日付のゲッベルスの日記には、以下の記述が見られる。

昨日：四六時中の会議（中略）ゾルフ閣下に会う。彼は私にユダヤ人問題に関する忠告をしてきた。このこと以外において、彼はきわめて好印象⁴⁵。

⁴⁰ Solf an von Hoesch, den 30. April 1926, BArchK, N1053-75.

⁴¹ Solf an von Hoesch, den 30. April 1926, BArchK, N1053-75.

⁴² クローデル、ポール／奈良道子訳『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』草思社、p. 183、1999年。

⁴³ Solf an von Hoesch, den 30. April 1926, BArchK, N1053-75.

⁴⁴ 中村綾乃「駐日大使ゾルフ —上下逆さまのオペラグラスで舞台を観る」言語文化共同プロジェクト2023『言語文化の比較と交流』(11)、pp. 33-34、2024年。

⁴⁵ Goebbels, Joseph, Fröhlich, Elke (Hg.). (1987). *Die Tagebücher von Joseph Goebbels: Sämtliche Fragmente*, Munich, New York, London, Paris: K. G. Saur, S. 420.

1933年当時、ゾルフはドイツで活動の場を奪われた「ユダヤ人」の亡命支援や日本での就職先の斡旋をしていた。1936年2月、ゾルフは病死するが、妻のヨハンナ（Johanna Solf）と長女のラギ（Lagi von Ballestrem）が意思を継いだ。ラギは1933年から1938年まで、上海でユダヤ人難民や亡命者の援助を行った。帰国後、母親のヨハンナとともに「ゾルフ・サークル」を組織し、反体制運動に身を投じた⁴⁶。

駐日大使として8年間、ゾルフは日本の政治家のみならず、フランスと英国、ロシア、中華民国、大戦後に独立した新生国家の大使や公使と交流した。文人大使として、文化と政治を橋渡しする立場で積み重ねた交流の経験は、ゾルフの政治的立場と政策志向にどのように結び付いていったのか、稿を改めて彼の政治構想、特に新党結成について論じてみたい。

⁴⁶ Boehm, Eric. H. (Ed.). (2015). *We survived: The stories of fourteen of the hidden and the hunted of Nazi Germany* (Illustrated ed.; Kindle edition). Pickle Partners Publishing, pp. 169-190; Schad, Martha (2010). *Frauen gegen Hitler: Vergessene Widerstandskämpferinnen im Nationalsozialismus*, München: Herbig. S. 132-160（田村万里／山本邦子訳『ヒトラーに抗した女たち：その比類なき勇気と良心の記録』行路社、pp. 169-200、2008年）

史料・参考文献

■ 文書館史料

Bundesarchiv, Koblenz (BArchK), N1053 (Nachlass Solf).

■ 文献

(欧文)

Boehm, Eric. H. (Ed.). (2015). *We survived: The stories of fourteen of the hidden and the hunted of Nazi Germany (Illustrated ed.; Kindle edition)*. Pickle Partners Publishing.

Cortazzi, Hugh (2004). *British Envoys in Japan, 1859-1972*, Kent: Global Oriental

Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T. (2005). *The Lost Man - Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

Schad, Martha (2010). *Frauen gegen Hitler: Vergessene Widerstandskämpferinnen im Nationalsozialismus*, München: Herbig. (田村万里／山本邦子訳『ヒトラーに抗した女たち: その比類なき勇気と良心の記録』行路社、2008年)。

von Vietsch, Eberhard (1961). *Wilhelm Solf. Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich.

(邦文)

アルバム・クローデル編集委員会『詩人大使ポール・クローデルと日本』水声社、2018年
飯田洋介「皇帝と大統領のあいだで—外交官シュテルンブルクとドイツの世界政策」桑名映子編『文化外交の世界』山川出版社、2023年。

クローデル、ポール／樋口裕一訳『天皇国見聞記』新人物往来社、1989年。

クローデル、ポール／奈良道子訳『孤独な帝国 日本の一九二〇年代』草思社、1999年。

ゾルフ、ヴェー・ハー、長田三郎訳(1926年)『将来の植民政策』有斐閣。

中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層—混合婚をめぐる議論を起点として」工藤章・田嶋信雄編『ドイツと東アジア 一八九〇—一九四五』東京大学出版会、2017年。

中村綾乃「ゾルフと第一次世界大戦—城内平和と懐疑、植民地の回復—」言語文化共同プロジェクト2018『言語文化の比較と交流』(6)、2019年。

中村綾乃「ドイツ革命とゾルフ—帝国の終焉から新生共和国へ—」言語文化共同研究プロジェクト2020『言語文化の比較と交流』(8)、2021年。

中村綾乃「駐日大使ゾルフ —上下逆さまのオペラグラスで舞台を観る」言語文化共同プロジェクト2023『言語文化の比較と交流』(11)、2024年。

長與進『チェコスロヴァキア軍団と日本 1918-1920』教育評論社、pp. 154-156、2022年。

日独交流史編集委員会編『日独交流 150年の軌跡』雄松堂書店、2013年。

ラムステット、グスタフ・ヨン著／坂井玲子訳『フィンランド初代公使滞日見聞録』日本フィンランド協会、1987年。

■ 新聞記事データベース

The Japan Times Archives

朝日新聞記事クロスサーチ

読売新聞 ヨミダス